

「近世村落社会における複合生業と村落的共同性」研究に関する覚書

平成 27 年 4 月 23 日受付

山 内 太*

要 旨

本稿は、現代のサラリーマン社会において当然視されている、単一生業によって生計を営むという見方の相対化を試みようとするものである。従来のように、稲作農民や漁民という、あたかも人々が単一の生業によって生活しているかのような見方を再検討する。同時に農村、漁村、山村という村落類型も見直す。漁業のみをやっている村などほとんどないわけであるし、また稲作だけを行っている村もやはりないわけである。近世期に各地域には、自然環境の影響を強く受け、各地域特有の様々な生業を複数組み合わせた生業構造が存在していたのである。特にこれまでの経済史研究にあっては、前近代社会の人々にとって大きな意味を持った自給的生業を無視しがちであった。そこで本稿では、現在、貧しい漁村であるとか、稲作単作地域であるとみなされている地域を取り上げ、その多様な生業の存在を確認してみた。

そして結果として、両地域において、自給的なものも含めて、多様な生業の存在を確認できた。

キーワード：近世、村落、生業、多様、自給

はじめに

本稿は、現代のサラリーマン社会において当然視されている、単一生業によって生計を営むという見方を相対化しようとするものである。現代サラリーマンがそうであるように、特定個人が単一の生業に従事し、そこからの収入のみにて生計を立てるとい生活の仕方は、ある意味特異なものであり、このような常識を自営業者や過去の人々の生活に投影することは、厳に慎まなければならないのではないかという問題意識がそこにはある。このような見方を引きずって過去の人々の生活を見てみると、従来のように、稲作農民や漁民という、あたかも人々が単一の生業によって生活しているかのようなレッテル張りをしてしまいがちである。あるいは地域についても、農村、漁村、山村という村落類型を設定してしまうこととなる。しかし漁業のみをやっている村、地域などほとんどないわけであるし、また稲作だけを行っている地域・農村もやはりないわけである。時代をさかのぼり、近世社会になれば、なおさらそうである。そこでは自然環境の影響を強く受け、各地域特有の様々な生業を複数組み合わせた生業構造が存在していたのである。しかも 18 世紀後半以降、市場経済化が村落社会におい

* 京都産業大学経済学部

て急速に進み、各地域の村落社会は、多かれ少なかれその影響を受けるようになる。つまり生業構造がより複雑化、複合化していったと考えられる。しかし近年の経済史研究は、単に農業+副業を行う経済主体としての小農経済を取り上げるに留まり¹、自給的生業も含めた複合生業の全体像を、近世という時代を意識しつつ、真正面から取り上げようとはしていない。特にこれまでの経済史研究においては、ある意味当然であるが、前近代社会の人々にとって大きな意味を持った自給的生業を無視しがちであった。そこでまず本稿では、現在、貧しい漁村であるとか、稲作単作地域であるとみなされている地域を取り上げ、その多様な生業の存在、豊かな生活の在り様を確認してみたいと思う。

フィールドとして取り上げたのは、角田浜村を中心とする新潟県旧西蒲原郡沿海諸村と、中郷屋村を中心とする西蒲原郡低湿地域である。この両村を中心に、江戸時代のこれらの地域の生業の在り方を再確認してみようと思う。

1 旧西蒲原郡中郷屋村と西蒲原低湿地域

中郷屋村が位置する西蒲原郡は、越後平野蒲原四郡のなかの西南部にあり、西は弥彦山・角田山と連なる沿岸山脈と砂丘で日本海を区切り、南縁は信濃川、燕下流の東縁は中之口川、北は中之口川が合流した信濃川の下流が囲む甘藷型の地形の土地である。山地を除外した部分はほとんど平坦な土地である。そして中央やや西寄りを西川が北流している。ところで西蒲原郡の耕地は、標高15m以下の地域に展開し、その大部分は標高10m未満であった。全体として標高は北に向かって緩やかに低くなっているのだが、特に西川と中之口川間の平坦部は、中央の鎧潟でやや窪地がみられ、それを超えると、標高1m以下の耕地が多くなり、また標高差が小さくなる。この鎧潟を筆頭として、西蒲原郡低湿地域には、大小幾つもの潟が存在し、そこを結節点として、多くの川や水路が走っていた。この地形的条件から、この地域では繰り返し水害を蒙り、水の管理に莫大なエネルギーを注いできた地域であったといえる²。

現在は、鎧潟他の潟も干拓され姿を消し、また多くの揚排水機の設置により、この低湿地域は、一面田地が広がる穀倉地帯に生まれ変わっている。そしてそれゆえにこそ、この地域は稲作単作地帯のイメージで語られることが多く、またそのイメージが過去に遡って適応されがちである。しかし実態はどうだったのか。まずは江戸時代末期の中郷屋村とこの地域の様子を、「村明細帳」という資料から確認してみよう。

中郷屋村の安永七年（1778）の「村明細帳」³に、村内には船が十八艘あり、しかもそれを「猟業米作船ニ相用申候」と述べている。家数は31軒と記載しており、多くの船を所有していたが、それを猟に用いていると明記しているのである。さらに注目すべきは、「女ハ布木綿等仕渡世送申候」との記載である。すでに18世紀後半の段階で、女性の生業として布木綿生産が記されているのであった。文政十年（1827）の「村明細帳」においても、船並びに女性の生業として同様の記述がある⁴。実は、中郷屋村のみならず、近世末期のこの地域の木綿織は有名であり、大野木綿、吉田木綿、曾根木綿、巻木綿と呼ばれ、越後の名産品となっていた⁵。このような木綿織業の発展を窺わせる事態も発生し

ている。天保十二年に長岡藩は、農業の障りになるとして木綿高機織の禁止令を出したという⁶。翌年には、「近來年若之者・小商等以多し候者多且結城機等之利潤尔走り候段不埒之事」⁷という命令を出している。それにも関わらずこれを無視する者がいたようで、このような者にたいし、「結城機停止申付候処不相用織子を集為織候趣相聞不埒之至ニ付」、過料を申し付けている⁸。しかしやはり高機生産の拡がりには止まらなかったようで、嘉永三年（1850）に七ヶ組割元連印にて、「近年高機子流行以多し追々増長、農業ニ差支ニも相成候尔付御停止御願申上候処毎度厳敷御停止被仰出候得共不心得者共不取用候・先願之通厳敷御停止被仰出被下置度奉願上候」という請願までなされていた⁹。このように近世末期にこの地域では、木綿生産、木綿織生産が、広範囲に展開していたのである。

話を中郷屋村に戻すと、この村の年貢割付の小物成部分には、それが年貢割付に記載され始めたことが確認できる最も古い資料である延享三年（1746）の年貢割付に、すでに艮役と紺屋役が設けられており、生業として染物を営む者が1軒存在していることが確認できるとともに、活発に狩猟、漁業も行われていたことが窺える¹⁰。中郷屋村は稲作のみを行っていた、自給的農村では全くなかったのである。

この地域の他の村々についても同様な記述が「村明細帳」からは見て取れる。「女ハ布木綿仕候右之他鰐濁ニ而菱等取稼候者」¹¹、「魚獵之儀三濁共魚鳥入会ニ渡世仕候」¹²、「女ハ布木綿仕候男ハ魚鳥獵并男女共ニ右之外蓮根蓮肉菱等稼ニ仕候」¹³、「男女作間稼之儀男ハ道具拵女ハ布木綿仕候男女共蓮根蓮肉等取稼」¹⁴、「作間ニ者前々より海川漁業仕候」¹⁵、等々の記載がみられる。この地域は水に苦しめられた地域であるが、逆に川や堀、濁から魚鳥をはじめとする様々な恩恵を受け、販売あるいは自給的消費に回すことを通じて、自らの生活を成り立たせていたのであった。この地域には戦後まで、魚やエビカニ、貝、鳥を採る様々な手法、道具、さらには習俗が伝えられており、豊かな資源の存在と、それを利用する人々の生活をうかがわせてくれる¹⁶。特に田や水路でフナやドジョウ等を捕獲する事例は、近年よく主張される水田漁労を彷彿とさせる事例であるといえるだろう¹⁷。

さらに畑作についても、この地域は活発な生産を行っていた。安政六年（1860）7月下旬、大風が吹いたことによって、畑作物に大きな被害が出た。その被害調査報告を見てみると、中郷屋村の意外な一面が見えてくる¹⁸。この村の畑総石高34石2斗4升のうち、被害を受けたのは、31石余りとされている。しかもそのうち18石は大豆であるが、12石は藍・野菜とされており、さらに6斗ではあるが木綿も挙げられていた。これらが全て自給用とは考えられない。特に藍や木綿が生産されていたことは注目される。農業においても、商品作物の生産が活発に行われていたのである。この調査には、他村の被害状況も述べられている。これを見ると隣村葉萱場村は、畑総石高約36石のうち35石余りが被害を受けているのだが、その被害状況は、木綿が10石、大豆15石、野菜等が10石であった。同じく隣村真田村は、畑総石高約69石のうち、68石が被害を受け、その被害状況は、木綿35石、大豆33石であった。両村ともかなりの割合で木綿生産が行われていたことが示されている。そのほか巻町の南隣赤館村でも、その総石高の約30%が木綿生産であり、その他藍も生産していた。漆山村でも1/4以上を木綿生産が占めていた。これらの村々にとどまらず、この地域の村々では盛んに木

棉生産が行われていたことが伺えるのである。やはりこの地域が、木綿織の産地となっており、そのためその原料である棉が積極的に栽培されていたことがうかがえる。

ところで中郷屋村の庄屋である笛木家が文政五年に販売した作物を見ると¹⁹、白米や酒米、かて米等米類の他に菜種、藍、大豆、胡麻、小豆、小麦、蒟蒻等を販売していた。またこの年のみではなく、翌年には、米類の他に、大麦、菜種、小麦、小豆、藍、胡麻等が販売されていた。先の畑作物被害調査において出ていた藍、大豆等の他にも多様な畑作物が販売されていたことがわかる。

このように多様な畑作物が栽培されていたのは、中郷屋村だけではもちろんない。木場村では、粟、稗、黍といった雑穀をはじめ、大豆、麦、小豆、胡麻、苳、菜、大根、里芋、菱、茶と、やはり木綿が作られていた²⁰。隣の黒鳥村の畑では、粟、稗、黍、大豆、麦のほか、胡麻、苳、小豆、菜、大根、里芋、麻、瓜、茶、茄子、木綿等を生産していた²¹。また中村では、麦、大豆、粟、稗、黍のほか、胡麻、苳、茶、小豆、蕎麦、菜、大根、木綿、藍、茄子、牛蒡等が栽培されていた²²。味方村では、大豆、麦、粟、黍、稗のほか、胡麻、小豆、菜、大根、麻、里芋、茶、木綿等が生産されていたという²³。これらの畑作物は、自給的に消費されるとともに、販売に回され、農家の貴重な現金収入源となったと考えられる。また上記村上藩領の村々では、早くから漆の栽培が奨励され、漆の木も存在していた。

さらにこの地域では、手工業的生業を行う人々も存在していた。木綿機織の広範な展開についてはすでに述べた。その他にも、各村々の小物成を見ると、紺屋役、鍛冶役、大工役、桶役、室役、請酒役等を収める村々が多く、これらの生業を行っていた人々が、この地域に広く存在していたことがうかがえる。また明治七年戸籍による、吉田郷村別諸渡世調査をみると²⁴、町場のみならず、村々に広範に、様々な生業を渡世としている人々が多数いたことが示されている。例えば鴻巣村には、農業渡世が60人いたが、そのほかに日雇いが7名、桶職が1名、医者2名、葺師2名、蠟燭師2名、僧が2名いた。また富永村には、農業渡世56人のほか、日雇いが4名、木挽職が1名、鍛冶職が6名、医者2名、蠟燭師1名、僧が2名、商いも1名いた。このように村々には、様々な職種の人々が存在していた。もっともこれらの生業を行っていた人々は、それのみを行っていたわけではなく、複数の生業のうちの一つとしてそれらの生業を行っていたと考えられる。

以上のような多様な生業の存在の結果、この地域には、巻、吉田、曾根、月潟、漆山、大野の六ヶ所に六斎市が開催されていた。これらの市では、米穀の他、大麦小麦、稗、塩、酒、小豆、大豆、木綿、練綿、醤油、炭、麻、酒、蠟燭等様々な日用品が売買されていた。この地域の人々が、これらの市において、必要な日用品を購入し、また販売していたのである。そして後述する角田浜村をはじめとする海岸沿いの人々も、この地域の市に訪れ、日用品等を購入していた記録もある²⁵。この地域の市が、より広範な地域を結びつけていたことをうかがわせる²⁶。稲作単作地帯、あるいは自給的な色彩の濃い農村地帯というこの地域のイメージは、修正されなければならない²⁷。

自給的、商品的を問わず、様々な生業が村々において展開し、一部は商品取引を伴い、市場経済が進展していたのである。今につながる稲作と共に、畑作や漁業、狩猟、様々な職人的、手工業的生業

が展開し、この地域の経済は成り立っていたのであった。そして人々は、稲作もやり畑作もやり、さらに漁業や狩猟もやるとともに、家の中では女性が木綿を織って生活していたのである。様々な生業を兼ねることによって、自らの生活を成り立たせていたのだと考えられる。この点にもっと注意が払われるべきではないかと筆者は考えている。

2 角田浜村を中心とする西蒲原郡沿海諸村

西蒲原郡沿岸部は、上述のように、弥彦山・角田山等の沿岸山脈の北、北東方向にはしる砂丘・砂丘間低地が続き、村々は主としてここに位置する。角田浜村も、この砂丘上に位置している。

沿海諸村というと、当然漁村というイメージが浮かぶ。近世期の角田浜村も、漁業の盛んな村であった。元文五年（1740）の村明細帳には、「當村男女稼耕作并海獵仕申候」と記載されており²⁸、また寛延四年（1751）の資料には、「農業之間男女稼之訳雪中ハ農具獵具拵春秋者浜方海獵仕候」と記されている。また文化二年（1805）の資料には、女の稼ぎとして、「女者・・（中略）・・魚獵有之候節ハ在方江買ニ罷在候」³⁰と記載されており、漁獲物を、主として女性が、後背農村地帯、つまり西蒲原郡低地域に売りに行っていたことが記載されている。

それでは角田浜村の漁獲物であるが、ひらめ、金頭、小かれい、いじみが、「春中手繰と唱ひ沖中網ニ而取之申候」としており、また大鯛は、「八十八夜分かりめと唱ひ夜中差網ニ而取之申候」とし、小鯛も獲れていた³¹。角田浜村の漁業はこの鯛類の収穫が中心であったようである。その他にも鱈、鰯、蛸、烏賊、海苔等が獲られていたという。

ただし以下のような記述もある。「尤当村之儀者作間ニいたし候故魚獵而已渡世仕候者無御座候」³²。額面通りに受け取れば、この村の漁業は、様々な存在する生業の一つであったと指摘しているわけである。

それではこの村の、漁業以外の生業を確認してみよう。まず製塩業があげられる。角田浜村に初めて小物成が賦課された元禄十六年（1703）には、すでに塩役が課せられていた。文政元年（1818）には、1貫650文であり、魚獵運上の700文よりはるかに多く、小物成全体の1/3を超える額となっていた³³。明治初年の「産物表取調書上帳」には製塩高は200石とされている³⁴。

さらに農業である。この村は明治初年において、米160石、大麦小麦合わせて96石余りを生産していた³⁵。特に注目すべきは大根生産である。すでに上記寛延四年の村明細帳に、畑方のおもな生産物として大根があげられているが³⁶、先の「産物表」では、実に18万本の生産がなされていた³⁷。上述『越後土産』には、この地域の沿海村五十嵐浜村の大根が上げられており、漁村と考えられるこの地域の村々において、畑作の果たした役割の大きさが見て取れる³⁸。

また「産物表」には、杉、松の伐採の記載もある。特に松は、「村方之者銘々日々之薪ニ伐出申候」³⁹とされており、燃料として松が伐採され、薪とされていたことがわかる。これらの薪は自給的消費にとどまらず、販売品として後背農村地帯に売り出されていたのではないかと考えられる⁴⁰。

最後に、角田浜村のみならず、この地域の沿海諸村の特色として、多くの出稼ぎ人を出したことを

あげておきたい。これらの出稼ぎ人は、都会へ出て日雇い等雑業層を形成するような人々ではなく、一定の技術を持った人々であった。次にこの点を確認してみよう。角田浜村は18世紀初期から、大工役を賦課されていた。そして天保十四年（1843）の調査によると、文化十四年（1817）からの26年間に、出稼ぎに出た角田浜村の人々の数は、男女合わせて101人となっている。そのうち男が99人であった。天保十四年次に角田浜村の人口は約1000人であるから、その1割近い人々が出稼ぎに出て行ったということになる。そのうち9割以上の人々は、木挽・大工であった。また出かけた先は、常陸・下野が多かった。木挽・大工といった技能を持った人々が、北関東に出稼ぎに出て行ったということになる⁴¹。角田浜村のみならず、この地域の沿海諸村には、大工や木挽等の技術を持つ人々が多数存在し、彼らの多くが出稼ぎ人として、主として関東に出て行ったのであった⁴²。

以上述べてきたように、角田浜村他この地域の沿海諸村は、単に漁村というに留まらない、様々な生業を保持していた。もちろん漁業を盛んに行っていたし、農業生産も行い、半農半漁の村的色彩を呈していたが、特に角田浜村は、それに留まらない姿を持っていた。農業と言っても水田稲作だけではなく、畑作による商品作物の生産・販売も行っていたし、また製塩業も展開していた。さらに大工・木挽といった手工業者も存在し、彼らの多くは出稼ぎ人として、関東へ旅立っていった。単に漁村、とは言い切れないような多様な生業を持ち、多様な経済活動を展開していたのであった⁴³。

結びに代えて

近世期における、角田浜村を中心とする西蒲原郡沿海諸村も、中郷屋村を中心とする西蒲原低湿地域も、共に単なる漁村、農村の枠組みに納まらない、多様な生業を保持し、様々な生業を行っていた。決してモノカルチャー的な単一の生業によって成り立っていた村々ではなかったのである。かえってそのような形態は、近代以降の、あるいは太平洋戦争後の産物であったのかもしれない。そしてこの地域の人々も、様々な生業を組み合わせ、各々の生計を成り立たせていたのだといえる。その中にはもちろん、市場経済的な経済活動も含まれている。しかし経済史研究でこれまで等閑視されがちであった自給的生業の存在も、もちろん大きな意味を持ったことだろう。近世期のこの地域では、この両者によって人々の生活が成り立っていたのであった。それゆえこの自給的活動を見落としてはならないと考える。

本稿で取り上げたフィールド、西蒲原低湿地域は稲作低生産力地域であり、水害常襲地帯とみなされてきたし、また沿海諸村は、半農半漁の貧しい漁村とみなされがちであった。しかし上述のような様々な生業を保持していたこれらの地域には、その自給的生業の存在も含めて、従来の経済史研究が捉えきれなかった「豊かさ」が存在していたのではないかと考えられる。今後は、このような近世期のこの地域が持つ「豊かさ」の内実と、それをもたらした生業活動の実態、並びにその生業を行うための人々のつながり、共同性の有り様を検討していきたいと考えている。

注

- 1 例えば谷本雅之『日本における在来的経済発展と織物業』（名古屋大学出版会 1998 年）、友部謙一『前工業化期日本の農家経済』（有斐閣 2007 年）等参照。
- 2 なおこの地域には、耕地を割り替える割地という土地制度が存在していた。この土地制度に関しては、別稿にて詳細に論じるつもりであるので、ここでは触れない。
- 3 笛木家文書 633
- 4 笛木家文書 639
- 5 （紀興之『越後土産 初編』（元治元年）。同書にはその他この地域の産物として、赤塚村のたばこ、月湯村の菅笠等が挙げられていた。
- 6 『吉田町史通史編上巻』（2003 年）365 ページ
- 7 西川町教育委員会『西川町所在史料集第 3 集』（1974 年）6 ページ
- 8 『吉田町史資料編 3 近世Ⅱ』（2001 年）118 ページ
- 9 前掲『西川町所在史料集第 3 集』（1974 年）63 ページ
- 10 笛木家文書 228
- 11 漆山村 文政十年 笛木家文書 638
- 12 葉萱場村 安永七年 笛木家文書 635
- 13 巻村 安永七年 松屋文書
- 14 横尾村 文政十年 『新潟市史資料編 4』
- 15 平島村 文久二年 『新潟市史資料編 4』
- 16 新潟県・巻町教育委員会『鑑濁』1966 年
- 17 佐藤洋一郎「農業とはそもそも何であったのか」末原達郎他編著『シリーズいま日本の農を問う 1 農業問題の基層とはなにか』（2014 年 ミネルヴァ書房）第 2 章 4。この水田漁労の問題については、今後より深く検討を進めていきたいと考えている。
- 18 笛木家文書 654
- 19 笛木家文書 1004
- 20 享保六年『木場村 諸色書上帳』
- 21 享保六年『黒鳥村 諸色書上帳』
- 22 享保六年『中村 諸色書上帳』
- 23 明治二年『味方村諸色書上帳』
- 24 新潟県農地部『今井家の地主構造』（1967 年）287・288 頁
- 25 巻町双書 35『角田浜願正寺年中故事』（1991 年）。
- 26 巻町史には、和納、巻、吉田、漆山各村、燕町において馬市の開催に触れている。これらの村々で馬市が開かれ、馬の取引が行われていたのであった。特に同書には、和納村の馬市再興を知らせる回状には、越後のほとんどの街道筋、信州上田、松本、諏訪地方の馬喰の名前が見えるとされており、馬取引を通じた、この地域の持つ広範なネットワークの存在を裏付けている（『巻町史 通史編上』1994 年 571-572 頁）。
- 27 巻町史には、漆山村田辺家や曾根村鮎屋五兵衛による鮎の製造販売について述べられている。彼らの弟子を含めて、広範囲に鮎の販売が行われていたことが示され、在郷商人の展開の一事例として述べられている（同上『巻町史 通史編上』579-585 頁）。
- 28 大越家文書 1037
- 29 大越家文書 1046 「高反別并村方模様書上ケ帳」
- 30 大越家文書 1051 「御尋ニ付書上帳」

- 31 以上大越家文書 1961「産物表取調書上帳」より。
- 32 大越家文書 1052
- 33 大越家文書 653「寅御年貢可納割附之事」
- 34 大越家文書 1961。製塩は夏から秋にかけての作業であり、主として女性の仕事であった。角田浜村の隣村五ヶ浜の村明細帳には、「渡世之儀者正月の三月迄手繰漁釣縄漁仕候四月の五月迄差網地引仕候六月より七、八月迄女共塩懸ヶ仕」と記述されおり、漁業を行う中で、その流れで製塩が女性の仕事として行われていたことをうかがわせる（『巻町史資料編 2』1988年、544頁）。
- 35 大越家文書 1961
- 36 大越家文書 1046
- 37 大越家文書 1961
- 38 角田浜ではその後、西瓜や甘藷の生産も盛んとなったようで、活発に西蒲原郡低湿地域に売りに回っている。また近隣の四ツ郷村では干し蕪が重要な商品となっていた（以上『巻町史資料編 6 民俗』1992年 490-491頁より）。
- 39 大越家文書 1961
- 40 亀井功・佐藤和男『角田浜村の歴史』（巻町双書 32 1984年 127 - 131頁）には、浜辺の村々から、燃料である薪・芝・松葉・杉枝・杉葉を購入した巻町の古老の話が掲載されている。当然、沿海諸村の人々にとって、これらの販売も貴重な現金収入であったと考えられる。
- 41 大越家文書 2163 並びに前掲『角田浜村の歴史』137 - 140頁。
- 42 五ヶ浜村の例であるが、文政十一年（1828）の調査によると、この村の諸職人の人数を 155 人とし、そのうち旅稼を行っている者が 137 人、居村の者が 18 人としている。この数字を見る限り、技術を持つもの的大部分が出稼ぎに出ていることになる（「諸職人惣人数名前并旅稼居村稼他領の奉公人人書上帳」前掲『巻町史資料編 3』488-493頁より）。
- 43 これらの他にも、もちろん廻船業を営んでいた者も存在していたことは、指摘しうる。加えて角田浜村他の地域の沿海諸村には、江戸末期から始まり、明治に入り盛んとなった毒消しの製造・販売があった。誠に多様な生業が存在していたものである。この毒消し売りについては、佐藤康行『毒消し売りの社会史』（日本経済評論社 2002年）を参照して欲しい。

A note on complex business and rural communities in early modern rural community

Futoshi YAMAUCHI

Abstract

I have tried to relative analysis that the older generation eked out a living by only business. I want to reassess the type of rural because I cannot find rural which has run only fishing or only rice cropping for a living. There were various characteristic businesses in early modern rural areas. I want to pay attention to self-sufficient business which was crucially important for early modern rural people. Also I wanted to confirm the existence of diverse business in areas which were generally-credited with poor fishing village or rice-growing village.

As a result, I found the existence of diverse business including self-sufficient business in both areas.

Keywords : early modern, rural, business, diversified, self-support

